

No. 113
地 学

玄武岩（湯島）

天草の大矢野島と島原半島の間に位置する湯島は、写真1のように、山頂が平坦で台形のような形をしています。この形はどうやってできたのでしょうか？

湯島には、凝灰質の砂岩・泥岩と海で堆積した砂岩・泥岩が分布し、それらの上に厚さ10m程度の玄武岩が積み重なっています。玄武岩の溶岩は粘り気が弱く流れやすいので、なだらかな地形を作ります。湯島の上面は、玄武岩質の流れる溶岩によって平坦な地形が作られました。



湯島に分布する玄武岩は、写真2に示すように、全体的に黒っぽく、ルーペで観察すると、ところどころに透明な黄緑色の粒や白い粒が見られます。この透明な黄緑色の粒はカンラン石、白い粒は斜長石です。また、写真3の偏光顕微鏡写真では、大きな粒子の周りに小さな粒子がたくさん集まっているのが見られます。このような組織を斑状組織といい、大きな粒子を斑晶、その周りの小さな粒子の集まりを石基といいます。湯島の玄武岩の場合、でダイダイ～赤色）と斜長石（直交ニコルで灰～白色）です。石できており、カンラン石の小さくて丸い粒子も見られます。湯島は、カンラン石玄武岩と呼ばれています。

湯島の玄武岩は、およそ82万年前に噴出しました。その当時、島原半島では、玄武岩や安山岩を主体とする火山活動が起こっていました。湯島の玄武岩はそれらの岩石と関係があるという考えがあります。湯島の地質については、島原半島の同じ時代の火山活動や堆積岩などを調べていくことで、より明らかになることが期待されます。

写真3 偏光顕微鏡写真



なお、現在の雲仙が出来始めたのは30万年前になりますので、湯島の玄武岩ができた時よりも、ずいぶん新しい活動になります。
(廣田志乃)



写真 1 湯島の全景

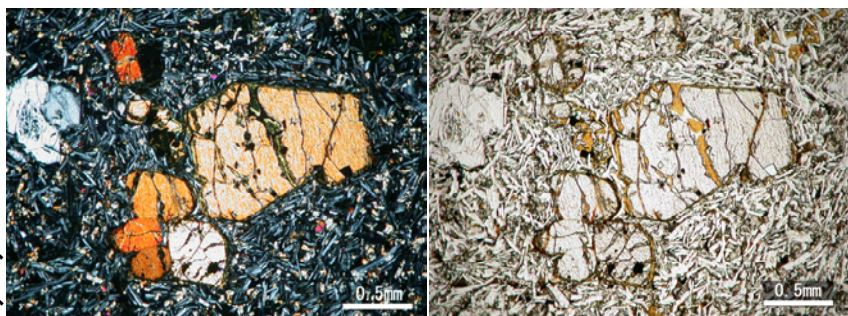


写真2 湯島に分布する玄武岩

このような組織を斑状組織といい、大きな粒子を斑晶、その周り　写真2　湯島に分布する玄武岩の小さな粒子の集まりを石基といいます。湯島の玄武岩の場合、斑晶はカンラン石（直交ニコルでダイダイ～赤色）と斜長石（直交ニコルで灰～白色）です。石基は主に斜長石の細長い粒子でできており、カンラン石の小さくて丸い粒子も見られます。湯島に分布するこのような玄武岩は、カンラン石玄武岩と呼ばれています。

湯島の玄武岩は、およそ82万年前に噴出しました。その当時、島原半島では、玄武岩や安山岩を主体とする火山活動が起こっていました。湯島の玄武岩はそれらの岩石と関係があるという考えがあります。湯島の地質については、島原半島の同じ時代の火山活動や堆積岩などを調べていくことで、より明らかになることが期待されます。

写真3 偏光顕微鏡写真



a: 直交ニコル

b: 開放ニコル

(偏光板を直交させる)



熊本県

松橋收藏庫

HPアドレス

<http://www.pref.kumamoto.jp/site/shuuzouko/>

869-0524

熊本県宇城市松橋町豊福 1 6 9 5

TEL 0964-34-3301

FAX 0964-34-3302

メールアドレス

shuuzouko_kumamoto@yahoo.co.jp

最新号及びバックナンバーは、熊本県松橋収蔵庫のホームページに掲載しています。是非ご覧ください。

熊本の自然と文化

松橋収蔵庫だより

No.21

VOL. 6-2

編集・発行
熊本県松橋町蔵車
宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301
2012年9月15日

◇松橋収蔵庫では、9月15日（土）から12月15日（土）まで、平成24年度第2回企画展示「ちょっと昔のくらし探検Ⅴ」を開催します。是非ご来館ください。

開館時間10時より17時 日曜・祝日休館



切り倒された中原天満宮のケヤキ 阿蘇郡高森町 1952年 荒牧英男撮影

平成24年度第2回企画展示

ちょっと昔のくらし探検 V

9月15日(土)~12月15日(土)

昭和30年代後半から40年代にかけての高度経済成長の下、機械化、電化が進み、また、プラスチックなどの化学製品の普及により、日本人の日々の暮らしは激変しました。

今回の展示では、ちょっと昔までは当たり前、でも今の子どもたちにとっては想像もできないような、暮らしと仕事の様子、道具などを紹介します。おじいちゃん、おばあちゃんから子どもまで、世代を超えて一緒に楽しんでいただけたら幸いです。

松橋収蔵庫「キッズミュージアム」大盛況でした

7月20日（土）21日（日）に松橋収蔵庫で「キッズミュージアム」を開催しました。今年は、松橋収蔵庫ミュージアムパートナーズクラブと松橋収蔵庫の共催で開かれ、交流支援クラブや草木染めの会の会員が中心となり、受付や子どもたちの活動の補助など行いました。

「水鉄砲づくり」「ウグイス笛づくり」など、親子で楽しく取り組む姿が見られました。「藍染め」「草木染め」では、草木染めの会会員の指導ですてきな作品が作られていました。プログラム参加者は延べ345名でした。来年もよろしくお願いします。



昔の玩具を作って遊ぼう

No. 109
民 俗 ミシン

ミシンは布や革などを糸で縫い合わせる機械です。ミシンの語源は、英語のsewing machine（ソーイング・マシン）とされています。国内に最初に伝来したミシンは、安政元年（1854）にペリー（提督）が第13代将軍徳川家定^{とくがわいえさだ}へ贈ったものとされています。明治時代に入ると都市部で洋装が徐々に広まり、ミシンの需要も増えていきました。写真は、大正時代末の製造と推定されるアメリカのシンガー製足踏み式ミシンです。熊本市内の家庭で使われていました。足踏み式ミシンは、踏み板を足で踏み動かすと横の車が回転してベルトを動かし、ベルトと繋がったミシン本体の小さな車が回り、それに連動して針が動く仕組みとなっています。シンガーは明治30年代に日本に進出し、洋裁学校を開いて日本人に洋裁の技術を教え、全国各地に直営店を開き、月賦払いを取り入れるなどしてミシンの普及に努めました。昭和10年代には国内のミシンメーカーも20社ほどありましたが、シンガーミシンはブランド力があり、当時の女性にとってあこがれの品でもありました。（迫田久美子）



44×121×78cm

No. 110
動 物 カヤキリ *Pseudorhynchus japonicus* バッタ目キリギリス科

カヤキリは、体長（翅端まで）63～67mmの大型のキリギリス科の一種で、ススキやヨシなど草丈の高いイネ科植物の草地に生息し、これらの若い茎や穂を食べます。7月の中旬頃からオスは夜になると前翅の発音器をこすり合わせて「ジャー—————」という大きな声で鳴きます。カヤキリは、他のバッタ目の昆虫に比べて後肢が短く、飛び跳ねることが得意ではありません。また大きな翅を持っていますが、ほとんど飛ぶことはなく、移動手段は歩くことが多いため、広範囲を移動することはありません。カヤキリは本州の関東以南に広く分布していますが、長野県などの内陸部では確認されていません。

また、定期的に刈り取られるなどして、イネ科植物の草地の状態が保たれていないと棲むことができません。環境の変化に敏感な種で、草原がなくなると共に、カヤキリも姿を消してしまいます。写真の標本は、2000年8月に宇城市松橋町で採集されたオスの個体です。（稲垣玲弥）

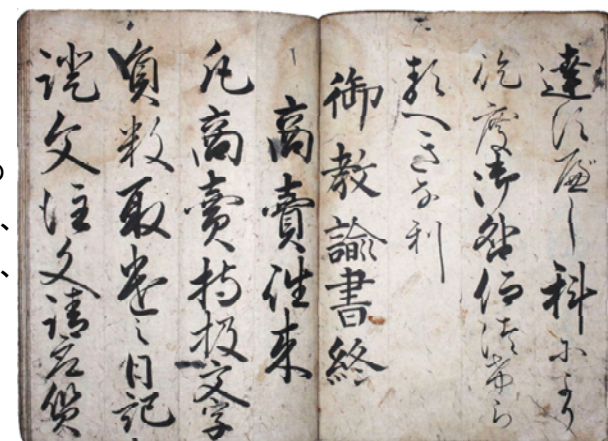
No. 111
歴 史 「御教諭書・商売往来写」 嘉島町安藤家資料

本史料は、「御教諭書」と「商売往来」が一冊に書写されたものです。表紙には文政11年（1828）の表記があります。

「御教諭書」は、文政5年（1822）に熊本藩が定めた農村の日常生活における規範です。親子、夫婦、兄弟関係等についての道徳を説き、百姓は農業に、諸職人は家業に専念すること、儉約を行うこと等が条文になっています。また、教諭書にあるような行いをした者は惣庄屋^{そうじょうや}へ報告され褒賞が下されることが定められています。

「商売往来」は元禄7年（1694）に大坂で刊行された、商業活動について書かれた往来物（教科書）です。商取引の記録・貨幣・商品・商人生活の心得について記されています。日常の生活に役立つ内容であることから、商人に限らず、庶民に広く読まれました。

ところで、藩で法令が出されると、惣庄屋・庄屋・頭^{かしら}百姓を通じて百姓に伝達されました。その方法として、読み聞かせや手習^{てならい}（習字）を行うことで周知徹底が図られました。本史料もそうした過程で読本・手習として作成されたことが考えられます。「御教諭書」・「商売往来」ともに勤勉・儉約・正直という共通の内容が教示されており、江戸時代の庶民教育の一端がうかがえます。（松本晃世）

No. 112
植 物 ムラサキ *Lithospermum erythrorhizon* Siebold et Zucc. (ムラサキ科)

ムラサキは、山地の草地に生育するムラサキ科の多年生草本です。茎は高さ70cmほどになって、上部は枝分かれます。枝の先には葉が交互につき、そのわきに小さな白色の花がつけます。根は太く、紫色の色素を含んでいるため、昔は高貴な色とされた紫色の染料として利用され、栽培もされていたようです。また、「万葉集」には、ムラサキが詠み込まれた歌がたくさん収められており、ムラサキが人々にとって身近な植物であったことがうかがえます。熊本県でもかつては各地で見られていたようです。

しかし、1960年代以降、その生育が確認できなくなっています。そのため『レッドデータブックくまもと2009』（熊本県）では、ムラサキは絶滅（EX）ランクに選定されています。写真の標本は1960年に水俣市で採られたもので、松橋収蔵庫に収められている熊本県産のムラサキの標本としては最も新しいものです。茎の先端には花が咲き、その下には灰白色で光沢のある実もたくさんついています。今では見られなくなったムラサキの姿を伝える貴重な標本ですが、熊本県で今後ムラサキが確認され身近な植物となり、最新標本の日付が更新されることを期待しています。（前田哲弥）



No. 118
民 俗

麻の着物

麻は通気性が良く湿気や熱を逃がすので、夏場の衣料によく使われます。写真1は麻の布で作られた夏用の仕事着です。球磨郡球磨村で昭和25年頃まで着用されていました。このような形状の仕事着は矢部地方や球磨地方などでタナシ、またはコダナシと呼ばれていました。タナシとは筒袖や巻袖のような袂のない着物のことです。球磨地方では木綿のタナシも併用されていましたが、麻のタナシは丈夫でイゲ（トゲ）にも負けないということで、特に山仕事で着用されていました。

写真2はカタビラと呼ばれる麻の着物です。夏の普段着やよそ行きとします。県内には、結婚して最初の盆に、婚家から嫁に家紋の入った麻の着物をハツカタビラといって贈る風習がありました。

現在、日常の衣服によく使われるのは木綿ですが、木綿の着物が一般的に全国で使用されるようになったのは、今から300年ほど前の江戸時代中頃からです。それ以前は麻が衣料の中心で、庶民は一年中、麻の着物を着ていました。

その昔、八代の人が川に麻が流れてくるのを見て、麻を求めて川を遡ったことから求麻（球磨の旧名）という名がついたという伝説もあるように、球磨地方は、古くから麻の産地として知られていました。（迫田久美子）



写真1 タナシ 球磨郡球磨村 身丈84cm、衿62cm



写真2 カタビラ(男性用) 八代市 身丈132cm、衿120cm



熊本県

松橋収蔵庫

HPアドレス

<http://www.pref.kumamoto.jp/site/shuuzouko/>

最新号及びバックナンバーは、熊本県松橋収蔵庫のホームページに掲載しています。是非ご覧ください。

〒869-0524

熊本県宇城市松橋町豊福1695

TEL 0964-34-3301

FAX 0964-34-3302

メールアドレス

shuuzouko_kumamoto@yahoo.co.jp

熊本の自然と文化
松橋収蔵庫だより

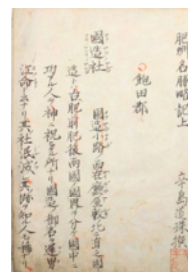
No.22

VOL. 6-3

◇松橋収蔵庫では、1月7日(月)から3月9日(土)まで、平成24年度第3回企画展示「肥後辛島家のひとびと」を開催します。ぜひご来館ください。

肥後辛島家は、江戸時代から明治・大正時代にかけて、時習館教員や熊本市長等を輩出しており、現在も辛島町・辛島公園にその名が残っています。

松橋収蔵庫が所蔵している辛島家伝来の資料から、歴代当主の著作物、熊本市政関係資料、辛島家と交流があった人物ゆかりの資料を展示し、初代・春種から14代・知己とその長女・信子まで、歴代当主とその業績を紹介します。



「肥州名勝略記」
辛島惟明（道珠）
の著作。肥後国2番目の地誌として、江戸時代に県内で最も多く書写されたといわれる。



《主な展示資料》

辛島家家系図 辛島家先祖附
肥州名勝略記 肥州古城主考
楽享貞心幅（谷文晁筆老松図）
山崎練兵場交換地見取図

《関連イベント》

講座「肥後辛島家のひとびと」

■第1回 1月19日(土)

第4代 惟明（道珠）

■第2回 2月2日(土)

第8代 才蔵（塩井）

■第3回 2月16日(土)

第12代 格

時間／午後1時30分

～午後2時30分

会場／松橋収蔵庫 学習ルーム

（事前申込は不要です）

平成25年 1月7日(月)～3月9日(土) 午前10時～午後5時(日曜日・祝日休館)

「フィールドミュージアムへ飛び出そう！」楽しかったよ！！

本年度の「フィールドミュージアムへ飛び出そう！」は、11月11日の「化石をクリーニングしよう」を最後に全てのプログラムが終了しました。「ヒメボタルの観察」「外来植物の観察」「星空の観察」など、現地に行って自然に触れながら様々な体験をしていくプログラムには、延べ314名の参加をいただきました。

森の中で光るホタル、望遠鏡で観た月の写真の撮影など初めての体験を喜ぶ参加者がいっぱいでした。

来年度も、いろいろなプログラムを準備したいと思っています。



化石を観察しよう

No. 114
動物ニホンマムシ *Gloydius blomhoffii* トカゲ目クサリヘビ科

ニホンマムシ（写真1）は全長45～80cmの日本固有のヘビ亜目の一種で、北海道から九州にかけて分布しています。頭は三角形で胴体は他のヘビと比べて太く短く、^{ぜにがた}銭型模様をしています。平地から山地の森林、^{やぶ}藪に生息し、ネズミなど小型哺乳類、^{はちゅうり}爬虫類、両生類等を食べます。ニホンマムシは爬虫類ですが卵を産みません。夏に交尾し母親の体内で^{かえ}孵り翌年の8～10月に子ヘビを産みます。そのため夜行性ですが冬眠直前や直後の個体、妊娠中のメスは日光浴のため昼間に活動することがあります。またニホンマムシには目と鼻の間にピット孔器という赤外線を感知する器官（写真2）を持っています。この器官は夜行性であまり視覚に頼らない種類のヘビに発達したもので、暗い中でも熱を感知することで獲物を探すことができます。

毒ヘビとして有名で咬傷事故が多いニホンマムシですが、性格は臆病でこちらから近づきすぎない限り咬まれることはありません。咬まれても毒は少量で効果が局所的なため死亡事故は少ないですが、毒性はハブよりも強く、草むらを歩く時には注意が必要です。

写真の標本は1999年6月に阿蘇郡長陽村（現南阿蘇村）で採集された個体です。（稲垣玲弥）



写真1



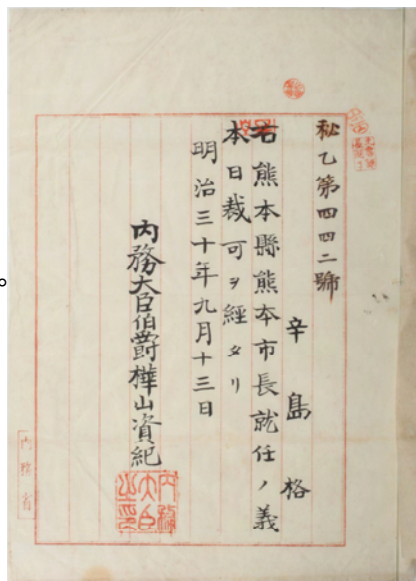
写真2

No. 115
歴史^{からしまいたる}辛島格^{さい か}熊本市長就任裁可通知書（熊本市辛島家資料）

本史料は、明治30年（1897）辛島格が第3代熊本市長に就任した時のものです。9月13日付で内務大臣^{かばやますけのり}樺山資紀から出されています。当時の市長は現在のような選挙ではなく、市会が推薦した候補者から天皇の裁可を経て内務大臣が選任して決定しました。

格は嘉永7年（1854）に熊本城下の^{しおやまちうら}塩屋町裏（現在の新町）で生まれました。明治10年（1877）の西南戦争で熊本隊に参加後、熊本師範学校に勤務、上益城下益城郡書記などを経て明治26年（1893）に八代葦北郡長、次いで八代郡長を務め、明治30年に熊本市長に就任し、大正2年（1913）まで3期に渡って16年務めました。市長として、市街地を分断し経済発展を妨げていた陸軍の^{やまさきれんべいじょう}山崎練兵場（現在の辛島町を含む一帯）の移転、市有基本財産の造成や、上下水道設置計画などを行い、市政確立、都市設備の改善に努め、熊本市の近代都市としての基礎を形成しました。後任の熊本市長^{やまだしゅいち}山田珠一は格について「職ニ当テ清廉事ニ処シテ公平」、「其市民ノ信頼頗ル厚クシテ在職多年能ク顕著ノ功績ヲ挙グルヲ得タル者偶然ニアラザルナリ」（『辛島熊本市長の功績』）と評しています。

本史料を含めた辛島格の関係史料は、企画展示「肥後辛島家のひとびと」で展示します。（松本晃世）

No. 116
植物アヤメ *Iris sanguinea* Hornem. （アヤメ科）

アヤメは山地の日当たりの良い草原に生育する多年草で、5～6月には高さ50cmほどに伸びた茎の先に青紫色の花を咲かせます。花色の異なる栽培品もあって、園芸や切り花などに利用されるなじみ深い植物ですが、『レッドデータブックくまもと2009』においては絶滅（EX）のランクに指定されています。これは自然に自生するアヤメが、1907年に合志市で生育していたのを最後に、確認されていないためです。現在、高森町や菊池市でみられる野生状態ののように見えるアヤメは、人の生活に影響を受けやすい場所に生育しているため、栽培個体が逃げ出した、あるいは植栽されたものと考えられています。

写真の標本のラベルには「熊本縣菊池郡西合志村 明治四十年五月廿日採集」と書かれており、1907年に現在の合志市にアヤメが生育していたことを示しています。松橋収蔵庫には、現在10点のアヤメの標本が登録されています。しかし、熊本県内産の自生のものは写真の標本の1点のみであり、熊本県にアヤメが自生していたことを示す貴重な資料です。（前田哲弥）

No. 117
地学^{はん せき}アクチノ閃石 *actinolite*

アクチノ閃石は、^{よう き せき}陽起石や^{りよくせんせき}緑閃石とも呼ばれる鉱物で、緑色でガラス光沢があるのが特徴です。この鉱物は柱状や繊維状になることが多く、放射状に集まると後光のように見えることから、ギリシア語のaktis（光線）から名付けられました。繊維状のアクチノ閃石の集合体は、アスベストのように、長く細い繊維状のものが縦にくっつき合ったような形態を示します。また、微小な繊維状の結晶が集まり緑色で緻密な塊となったものは、ネフライト（^{なんぎょく}軟玉）と呼ばれ、宝石や彫刻素材として扱われます。

アクチノ閃石は、玄武岩などの^{えんきせい}塩基性の火山岩や、マグネシウムを多く含む石灰岩が、プレートの動きによって地下深くまで沈み込み、高い圧力が加わり、岩石が別な岩石に変質していくときにできます。

写真の標本は、上益城郡益城町津森の金山川流域で採取されたアクチノ閃石です。金山川流域には、木山変成岩と呼ばれる地下深くで高い圧力を受けてできた変成岩（^{けっしょうへんがん}結晶片岩）の地層が分布しています。木山変成岩の中で緑色をしている岩石（玄武岩が変質した結晶片岩）の中から見つかりました。（廣田志乃）

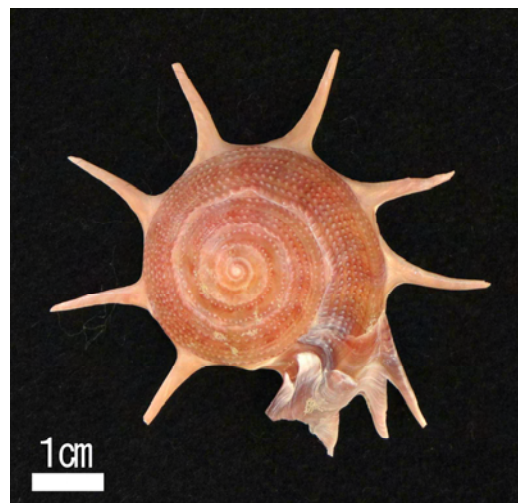


No. 123
動物リンボウガイ *Guildfordia triumphans* 原始腹足目リュウテンサザエ科

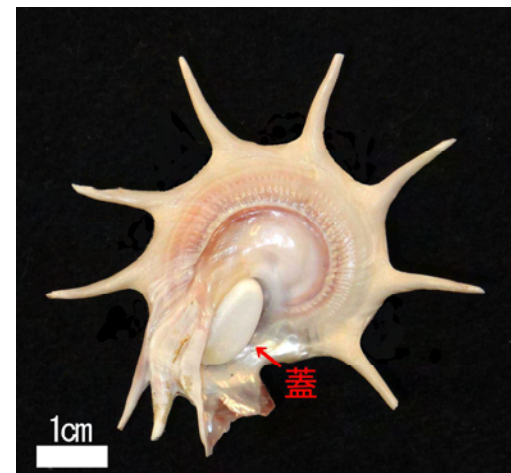
リンボウガイは、房総半島及び能登半島より南側の海の、水深50～300mの砂底に生息しています。平べったく、殻の幅が6cmほどの赤褐色から薄いピンク色をした美しい貝で、日本貝類学会の紋章にも使用されています。殻の上面と殻底に小さな顆粒^{もんじょう}を持ち、体層^{たいそう}（一番外側の巻き）の周りから7～9本の刺状^{とげじょう}の突起が出ています。この突起は殻が成長するにつれて順次落ち、新しいものに替わっていきます。突起があった痕跡は渦を巻いている接合部に見ることができます。また、殻の内側は真珠層^{しんじゅそう}で光沢があり、石灰質の厚い蓋^{ふた}を持っています。これはリュウテンサザエ科の特徴でもあります。

また、松橋収蔵庫には、突然変異によって縞模様が入る色帯異常^{しきたいいじょう}の標本や、通常よりも突起の数が多く不規則に伸びていたり、突起の数が倍数になり規則的に出てくる標本も収蔵されています。普段あまり馴染みがないように思えますが、カレイなどの底引き網漁と一緒に採れることもあり、決して珍しい貝ではありません。写真の標本はすべて熊本県天草市（旧・牛深市）で採集されたものです。

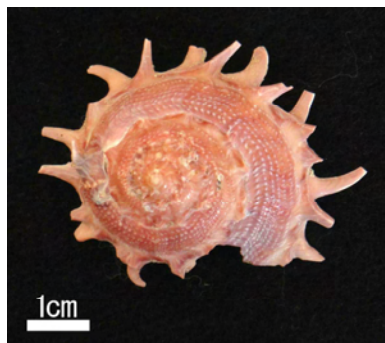
（稲垣玲弥）



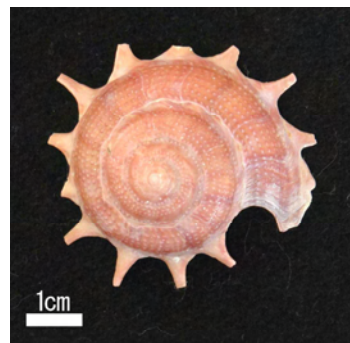
リンボウガイ（上面）



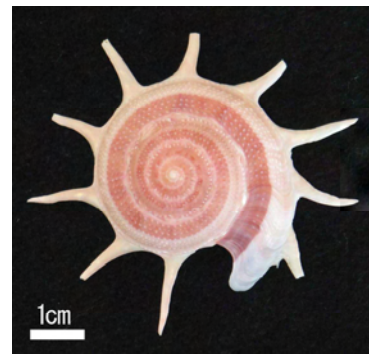
リンボウガイ（殻底）



突起の多く不規則に伸びる標本



突起の数が倍数になった標本



色帯異常



熊本県

松橋収蔵庫

HPアドレス

<http://www.pref.kumamoto.jp/site/shuuzouko/>

最新号及びバックナンバーは、熊本県松橋収蔵庫のホームページに掲載しています。是非ご覧ください。

〒869-0524

熊本県宇城市松橋町豊福1695

TEL 0964-34-3301

FAX 0964-34-3302

メールアドレス

shuuzouko_kumamoto@yahoo.co.jp

編集・発行
熊本県松橋収蔵庫
宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301
2013年3月15日

熊本の自然と文化

松橋収蔵庫だより

No.23

VOL. 6-4

熊本県松橋収蔵庫 平成24年度第4回企画展示

火山と地震

平成25年3月22日(金)～5月31日(金)

午前10時～午後5時（日曜日・祝日休館）

日本列島は、4つのプレートがぶつかり、大陸のプレートの下に海洋のプレートがもぐり込む位置にあります。そのため、日本列島では火山の活動や地震の活動が活発で、災害を引き起こす原因になると同時に、火山が作る風景や温泉などの恵みを私たちにもたらしてくれます。

今回の展示では、日本にはなぜ火山が多いのか、火山の噴火にはどのようなものがあるのか、また、なぜ地震が多く発生するのかなどについて科学的に解説し、自然と人との共生を探っていきます。



皿石（阿蘇中岳）
＊スケールの長さは2cm



寛政の大津波の津波石（玉名市横島町）

●関連企画●

<講座>

1. 「地震と火山から考えること」

期日：平成25年4月13日（土）

講師：須藤靖明氏（阿蘇火山博物館学術顧問）

2. 「火山噴火の特性と阿蘇」

期日：平成25年4月20日（土）

講師：渡辺一徳氏（熊本大学名誉教授）

3. 「寛政大津波と三陸大津波（3.11大津波）とを比べ重ねて」

期日：平成25年5月18日（土）

講師：堀川治城氏（熊本地学会元会長）

時間：午前10時～12時

会場：熊本県松橋収蔵庫 学習ルーム

（事前申込は不要です）

「バックヤードツアー」開催されました！！

本年度は、11月18日（日）と2月24日（日）に「バックヤードツアー」を開催しました。

普段は見ることのできない収蔵庫の「収蔵室」を職員が案内しました。民俗関係の部屋には「ちょっと昔の暮らし探検」で展示されていた農機具や昔の生活道具がたくさん並び、剥製がたくさん並んでいる部屋や、化石や岩石がコンテナに入れられ収蔵してある部屋、植物標本が科ごとに分類され収蔵してある部屋などを見学しました。



古文書を見学

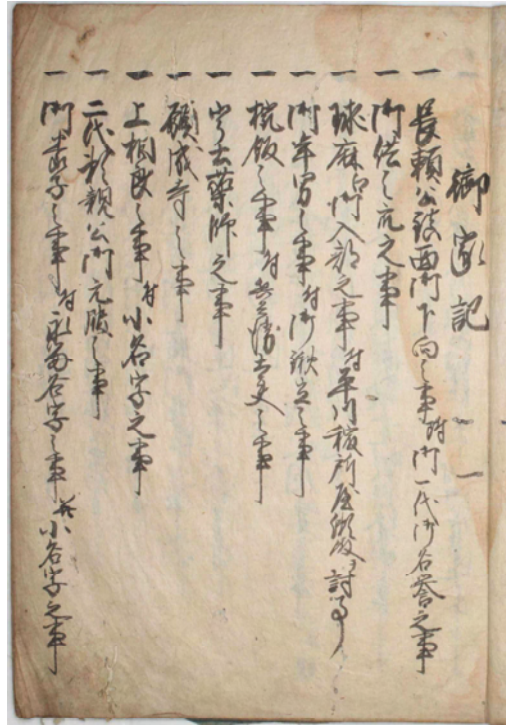
No. 119
歴史ご か き う つ し
御家記写もり した い さ お
(森下功旧蔵資料)

本史料は、鎌倉時代に入吉荘の地頭として肥後国に下向した相良長頼を初代とし、第20代頼房（長毎）が寛永13年（1636）に死去するまでの相良家の、歴代当主に関する事績や家臣の武功などを記述したものです。全6冊あり、奥書には、稲富喜八郎が安永9年（1780）3月に正本を蓑毛弥右衛門に借りて書写したと記されています。相良氏は戦国時代にかけて球磨・八代・葦北に勢力を拡大、分国法の一つとして知られる「相良氏法度」を出すなど、領地の支配を進め、江戸時代には入吉藩主となり、明治維新まで藩を存続させました。

家の歴史や記録をまとめた家記類の編纂は江戸時代に広く行われ、家の由緒を示す重要なものでした。相良家ではこの『御家記』の他に、『歴代参考』や『嗣誠独集覧』などが編纂されました。それぞれの内容には、加筆・削除された箇所や異なる部分もみられ、比較検討することでその編纂意図や過程を探ることができます。

本史料を旧蔵していた故森下功氏は、熊本近世史の会や肥後金石研究会の会長を務め、熊本の歴史研究を牽引されました。熊本の歴史に関するものを中心として広く史料を収集されており、研究上重要なものとなっています。

(松本晃世)

No. 120
植物ルリハッカ *Amethystea caerulea* L. (シソ科)

ルリハッカは高さ40～80cm程のシソ科の一年草です。9～10月に小さなり色の花を咲かせ、子房は縦に浅く4裂し、おしべは2本で長く伸びます。果実の表面には網目模様があります。葉は1cmほどの柄があり、3～5つに切れ込みます。日本では本州と九州に分布するとされていますが、もともと数が少なく、環境省のレッドリストでは絶滅危惧IA類（CR）に選定されています。熊本県では1950年以降確認されておらず、絶滅（EX）に選定されています（レッドデータくまもと2009）。他の都道府県では、青森県で環境省のCRにあたる最重要希少野生植物（Aランク）、岩手県と愛媛県で情報不足種（DD）に選定されています。

写真の標本は、松橋収蔵庫に収蔵しているルリハッカの標本としては最も古い、1930年に荒尾市の有明海沿岸の海岸で採集されたもので、ラベルや添付のメモには「砂浜の荒地」などの書き込みがあります。ルリハッカの生育環境は、他の文献では「日当たりの良い草地」や「乾いた裸地状の環境」となっていますが、この標本は寒暖や乾燥の激しい海岸の砂地に生育していたと考えられます。この標本は、ルリハッカの生態を明らかにする新たな手がかりとなるかも知れません。

(前田哲弥)

No. 121
地学約300万年前のブナの葉の化石 *Fagus crenata* Blume

今からおよそ300万年前、熊本県と福岡県、大分県との県境付近には小さな湖が所々にありました。これらの湖は、周辺の火山活動が活発になったために、火山噴出物や周囲からの土砂の流れ込みによって埋められ、消滅しました。これらの湖の堆積物は、長い年月の間に地中に埋もれてしまいましたが、浸食や開発によって表面に現れることがあります。このようにして見つかった湖の堆積物の一つが、山鹿市鹿北町椎持星原にあります。

写真の標本は、星原に分布する湖の堆積物から産出したブナの葉の化石です。星原では、主に落葉広葉樹の化石が産出しており、ブナが最も多く見られます。この時代の植物化石と現在生きているものとは、形が同じなので、現在生きている植物の学名をそのまま用います。この標本も現在のブナの葉と同じ形をしています。

ブナの葉の化石や他の落葉樹の葉の化石などから、星原の湖が埋まった頃、湖の周りにはブナを中心とする落葉樹林が広がっていたことが分かります。今の九州で見ると、ブナ林は標高1000m以上の山地で見られます。星原の標高は約500mであり、このことから、湖が埋まった当時の気候は、現在の気候より涼しかったことが分かります。

(廣田志乃)

No. 122
民俗

ドンザ

この資料はドンザと呼ばれる着物です。天草市五和町二江の漁師が、冬場の船上での防寒着として、また雨具として用いていました。着物や布を何枚も重ね、刺し子を施して仕上げられています。

そのためやや重いのですが、丈夫で、防寒・防水に優れています。また、労働の邪魔にならないよう、袖は巻き袖になっています。ドンザは、古い着物や端布を利用して作られることが多いのですが、漁師として一人前になった時などに、新しい布に美しい刺し子の文様を入れたものが贈られることもありました。

この資料のような着物をドンザと呼び、漁師の防寒着として、西日本の沿岸部一帯に分布しています。しかし、ドンザとはそれだけではないようです。例えば県内では、球磨地方で裂織の着物をドンザと呼んで山仕事に用いていました。また、天草地方では、蒲団として用いる綿入れの夜着をドンザと呼ぶ例もあります。ドンザという言葉については、もう少し調べてみる必要があるようです。（迫田久美子）



天草市五和町二江 大正末まで使用
身丈130cm、衿60cm

No. 128
歴史

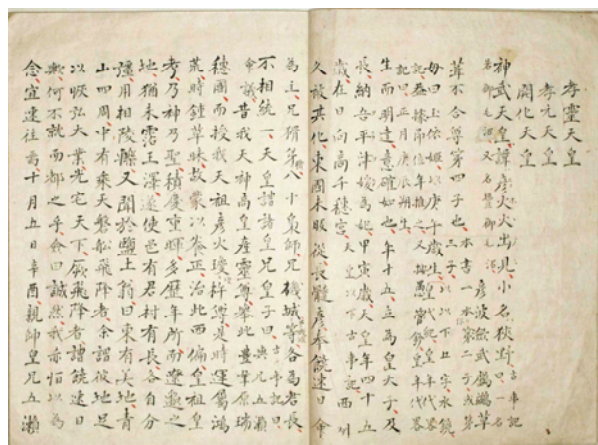
大日本史 （熊本市辛島家資料）

『大日本史』は、神武天皇から後小松天皇（室町時代前期、南北朝合一の時の天皇）までの歴史が漢文で叙述された歴史書です。徳川光圀が明暦3年（1657）に修史事業を開始し、水戸藩で編纂が続けられ、約250年かけて明治39年（1906）に全402巻が完成しました。

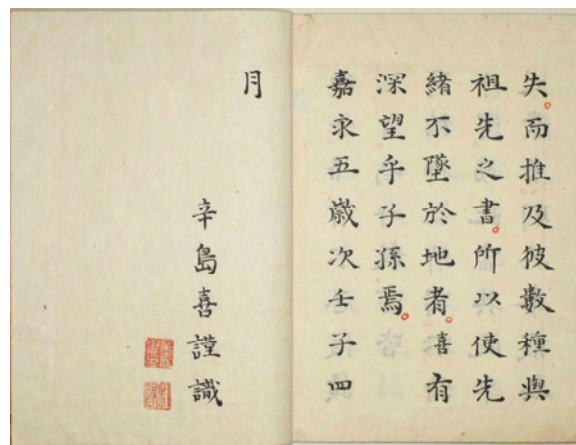
本書では、それまでの日本書紀などの国史編纂で用いられてきた、年代順に出来事を記す体裁の編年体に対し、本紀（歴代天皇の記録）・列伝（主要人物の伝記）・志（分野別の歴史）・表（年表・人名表）で構成される紀伝体がはじめて用いられました。また、内容では、神功皇后を本紀ではなく列伝に入れたこと、大友皇子の天皇即位を認めたこと、南朝を正統としたことが他の史書と異なる三大特筆として挙げられます。

本資料は、熊本藩に学者として代々仕えた辛島家に伝わったものです。享保5年（1720）までに編纂された本紀と列伝の243巻、目録、引用書目などの全250巻を書写した写本で、全70冊にまとめられています。

70冊目の巻末に、嘉永5年（1858）4月に辛島多喜次によってこの写本の作成経緯（識語）が記されています。それによると、辛島家は代々儒学を修め、多数の書物を所蔵していましたが、『大日本史』はいまだ所蔵しておらず、最も欠いてはいけな書物であるとして、辛島大七が数年かけて全250巻の書写を完成させ、多喜次も共に誤字脱字の訂正を行い、辛島家の蔵書で欠けていたものを補ったとあります。大七は、藩校時習館第4代教授であった辛島才蔵の養子として辛島家に入りました。多喜次は才蔵の次男で大七の弟にあたります。大七はこの『大日本史』を書写した後、嘉永5年2月に病気で急逝しました。多喜次は膨大な量の書写を行った大七の功を労い、子孫まで守り続けていくよう記しています。（松本晃世）



本文



識語の一部分



表紙



熊本県

松橋収蔵庫

HPアドレス

<http://www.pref.kumamoto.jp/site/shuuzouko/>

最新号及びバックナンバーは、熊本県松橋収蔵庫のホームページに掲載しています。是非ご覧ください。

〒869-0524

熊本県宇城市松橋町豊福1695

TEL 0964-34-3301

FAX 0964-34-3302

メールアドレス

shuuzouko_kumamoto@yahoo.co.jp

熊本の自然と文化
松橋収蔵庫だより

No.24

VOL. 7-1

熊本県松橋収蔵庫 平成25年度第1回企画展示

貝類の不思議

平成25年 6月14日(金)～8月31日(土)

午前10時～午後5時 (日曜・祝日休館)

貝類は世界に約10万種類以上が生息するといわれ、日本にも約1万種が生息しています。本展示では、松橋収蔵庫が所蔵する立志徹郎コレクションや松本達也コレクションの貝類の中から、日本のみならず世界的にも貴重な貝類を展示し、貝類の多様な世界と貝と人々との関わりを紹介します。



《関連企画のお知らせ》

1. 展示解説
期日：7月27日(土) 10:30～12:00
会場：松橋収蔵庫
講師：松本達也氏(貝類研究家)
2. 貝の何でも鑑定会(貝の名前を調べます)
期日：8月24日(土) 10:30～15:00
会場：松橋収蔵庫
講師：松本達也氏(貝類研究家)
※事前申し込みは不要です。
調べたい貝をお持ち下さい。

「火山と地震」展示講演会がありました！！

企画展示「火山と地震」の関連企画で、3回の講演会を行いました。4月13日には阿蘇火山博物館の学術顧問須藤靖明先生によるプレートと日本列島の話、4月20日には熊大名誉教授の渡辺一徳先生による火山噴火と阿蘇火山の話、5月18日には熊本地学会前会長の堀川治城先生による津波被害についての話をいただきました。

専門的なことを分かりやすく話していただき、参加者からも様々な質問があり、実り多い講演会になりました。



No. 124 植物 キイレツチトリモチ *Balanophora tobiracola* Makino (ツチトリモチ科)

ツチトリモチの仲間は、他の植物の根から栄養をもらいながら生活する、多年生の寄生植物です。地下の根茎がよく発達し、その中に宿主の根を引き込んで栄養を吸収しています。

キイレツチトリモチは、海岸近くの自然林を構成するトベラ、シャリンバイ、ネズミモチなどの樹木に寄生します。鹿児島県喜入町で初めて採集されたことからこの名があります。10～11月ごろ花茎をのばして先端に長卵形の花穂をつけます。花には花穂表面に密集する雌花と点々と目立つ雄花があり、雄花の花粉は蜜を求めて花を訪れるアリによって雌花へ運ばれます。キイレツチトリモチは暖かい地方の植物で、分布域は九州の南部と西部、および南西諸島の海岸近くの自然林に限られています。熊本県では、天草市での生育が確認されていましたが、もともと希少なうえ、近年の確認情報がないため絶滅危惧IA類に選定されています（レッドデータくまもと2009）。

写真の標本は、2010年に天草市の島でトベラに寄生していたキイレツチトリモチの液浸標本です。最近の生育の証拠となる重要な標本です。（前田哲弥）



標本写真



キイレツチトリモチ生態

No. 125 地学 アプライト花こう岩

「アプライト花こう岩」とは、長石や石英といった無色鉱物でできた真っ白な岩石です。鉱物の種類は、長石と石英がほとんどですが、黒雲母や白雲母、ザクロ石、電気石を多少含むことがあります。岩石の組織は、ガラスを含まず全て結晶からなり（完晶質）、結晶の大きさがほぼ揃っており（等粒状組織）、鉱物固有の結晶面が出ていない（他形）という特徴があります。アプライト花こう岩は、花こう岩や閃緑岩に伴い、岩脈状の岩体として産出されます。

写真の標本は、木葉山で採取されたアプライト花こう岩です。白色の岩石全体に褐色の小さな粒が含まれているのが肉眼でもわかります。この小さな粒はザクロ石の結晶です。

木葉山周辺では、玉名花こう閃緑岩が三郡変成岩類に貫入しています。両方の岩体が接する部分の玉名花こう閃緑岩は、白っぽく、巨晶花こう岩やアプライト花こう岩の岩脈を伴っています。標本の岩石は、このような岩脈で採取されたものです。木葉山周辺には、このアプライト花こう岩だけでなく、花崗岩の貫入により熱変成を受けた結晶質石灰岩や結晶片岩など様々な種類の岩石が分布しています。（廣田志乃）



No. 126 民俗 ツヅラの籠

県内の山間部では、蔓で編んだ四角い背負い籠が作られ、道具や弁当を入れて山仕事に行ったり、収穫した野菜を入れて運んだりするのに使われていました。水俣市久木野ではこのような籠をカガイまたはカガリと呼んでいます。写真のカガイはツヅラ（ツヅラフジ）で作られているのでツヅラカガイと呼ばれていました。

ツヅラカガイの製作には、まず作りたい大きさの板型を用意します。ここにたて材となるツヅラを巻きつけます。よこ材は、底面と、下から5 cmほどまでの側面と、上の縁は目を詰めてきっちり編み、間は間隔を空けて数段編み込みます。これにより丈夫で軽く、型崩れしにくいものが仕上がるのですが、素材の太さや作りたいカガイの大きさ、作り手の好みなどにより様々な編み方がなされていました。

ツヅラは蔓植物の総称ですが、県内ではツヅラフジかミツバアケビを指すことが多いようです。ツヅラは山に多く自生しており、細工がしやすく、丈夫で長持ちするため、古くから縄や籠などに利用されていました。ツヅラの籠は、山の暮らしに沿った道具の代表ともいえます。（迫田久美子）



使用地 水俣市久木野
使用時期 戦前まで

No. 127 動物 ツクシマイマイ *Euhadra herklotsi* (Martens) (オナジマイマイ科)

ツクシマイマイは殻高22～24mm、殻径40mmほどの大型の陸貝で、平地の森林から人家の付近まで普通に見ることができます。熊本県で暮らす私たちにとって最も身近な「カタツムリ」ですが、実は九州と山口県西部にしか生息していません。

いわゆるカタツムリと呼ばれる陸貝は日本全土に広く生息しており、色や形がよく似た種類が多く、一見しただけでは分類がとても難しく、生殖器の形で別種と判断します。

一般的にツクシマイマイの殻は低い円錐型をしており、黄褐色の地色に褐色の色帯と呼ばれる模様があります。その色帯の変異は著しく、色の濃い個体から薄い個体まで、幅の広い個体から細い個体まで、実にさまざまです（写真2）。なかには、写真2の左下のように色帯が全くみられない個体もいます。

このように、同じ種でありながら別種と思えるほどの変異を持っているのがツクシマイマイの魅力のひとつです。この身近なカタツムリを観察して、大きさや形だけでなく、色帯の違いにも目を向けて見るとおもしろいと思われます。（小原舞）



写真1



写真2

No. 133
動物

ハチクマ *ernis ptilorhynchus* タカ目タカ科



ハチクマ（メス）

全長約60cm、翼開長は約120～135cmのタカの仲間で、九州以北の平地から低山にかけて飛来する夏鳥です。

昆虫類や両生・爬虫類などを主食とし、クロスズメバチなどのハチ類も捕食することが名前の由来となっています。顔の周囲に注目してみると、ウロコのような小さな羽毛に密に覆われていることが分かります（写真1）。このようになっているのはハチからの攻撃を防ぐためではないかと言われています。雌雄はほぼ同色ですが、羽色や模様に着しい個体変異があります。オスの成鳥は顔が灰青色で、尾羽には2の太い横帯があります。メスは尾羽に

はオスほど太くない横帯が2～3本あるのが特徴です（写真の剥製はメスです）。

ハチクマは9月中旬から下旬頃にかけて、日本から中国南部や東南アジアへと渡っていきます。九州では北九州が渡りのメインルートになっていますが、ルートからはずれた熊本県でも金峰山や雁回山で渡りを観察することができます。飛翔しているハチクマの見分けるポイントとしては、大きさがハシブトガラスより少し大きいくらいということや、翼前縁から頭頸部が突きだして見えることなどが挙げられます。

秋晴れの澄んだ空を見上げて、舞い上がるように高く遠くへ飛んでいくハチクマの姿を観察してみたいかがでしょう。（小原舞）



写真 1



熊本県

松橋収蔵庫

HPアドレス

<http://www.pref.kumamoto.jp/site/shuuzouko/>

最新号及びバックナンバーは、熊本県松橋収蔵庫のホームページに掲載しています。是非ご覧ください。

〒869-0524

熊本県宇城市松橋町豊福1695

TEL 0964-34-3301

FAX 0964-34-3302

メールアドレス

shuuzouko_kumamoto@yahoo.co.jp

編集・発行
熊本県松橋収蔵庫
宇城市松橋町豊福1695
Tel 0964-34-3301
2013年 9月15日

熊本の自然と文化 松橋収蔵庫だより

No.25

VOL. 7-2

学びや発見がいっぱい

熊本県松橋収蔵庫 フィールドミュージアム 講座 移動体験教室

松橋収蔵庫では、県民の皆様に自然と文化の学びをしていただくため、フィールドミュージアム、講座、移動体験教室などを開催しています。

フィールドミュージアムでは、海辺の生き物の観察や、湿地の植物の観察、天体観察を行いました。10月にはキノコの観察会を行います。

また、地域の自然や歴史、民俗に関する観察会など、講師としてお伺いすることもできます。松橋収蔵庫の職員を活用した地域の学習会を考えてみませんか。

詳しくは、松橋収蔵庫にお問い合わせください。



フィールドミュージアム
海辺の生き物を観察しよう



移動体験教室
古銭のレプリカを作ろう

「キッズミュージアム」がありました！！

松橋収蔵庫の夏休み恒例企画となりました「キッズミュージアム」が7月20日（土）21日（日）に行われました。

400名を超える親子の参加がありました。参加者は、竹を使った水でっぽうづくり、セミのぬけがらがし、古銭レプリカづくり、鉱物万華鏡づくり、草木染めでエコバックを作ろうなど、様々なプログラムで、楽しい体験ができ、自分の作品をうれしそうに持って帰る姿が見られました。



No. 129
歴史

沖縄県修学旅行日誌（森下功旧蔵資料）

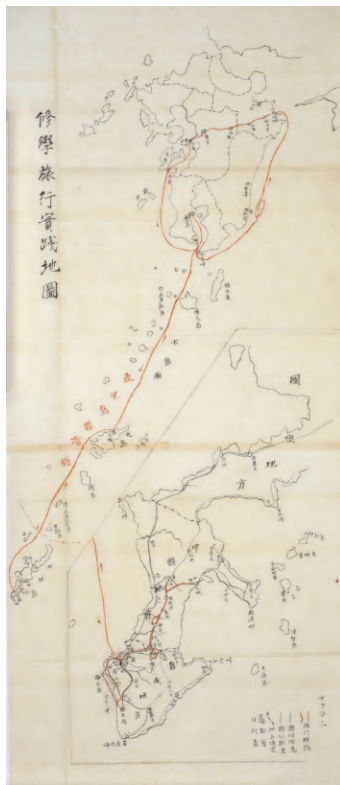
本史料は、明治27年（1894）に熊本尋常師範学校で行われた沖縄への修学旅行の日誌で、学生の近藤栄次によって記されたものです。熊本尋常師範学校は小学校の教員を養成する学校で、熊本市藪の内町（現城東町）にありました。

日誌によると、修学旅行は4月9日から27日まで19日間かけて、生徒や職員を合わせた100名で、徒歩と汽船での航海による行程で行われました。学校を出発して三角港へ行き汽船に乗り、鹿児島港を経て那覇へ到着、糸満、首里、中城などへ行っています。帰路は、那覇から鹿児島港へ、そこから大分の臼杵港へ行き、竹田、坂梨を通して学校へ戻っています。

修学旅行の目的は、新しい知識を得ること、困難辛苦に耐えること、沖縄の学生と交流をすることとあり、旅行先では師範学校の生たちと交流し、沖縄の歴史や風俗、方言などを学んでいます。また、航海中に鰯が船と併走している様子や飛魚を見たこと、帰路で那覇から鹿児島港に着いたときには、「陸ニ上ルヤ喜色一面ニ溢ル、然レドモ尚未ダ船中ノ夢醒メズ歩行常ナラザルヲ覚フ」と船旅の感想なども記され、旅行中の光景が伝わってきます。（松本晃世）



表紙

沖縄県修学旅行日誌
（森下功旧蔵資料）No. 130
植物ヒノキバヤドリギ *Korthalsella japonica* (Thunb.) Engl. (ヤドリギ科)

ヒサカキ（ツバキ科）やネズミモチ（モクセイ科）の枝に、緑色の枝のような物が生えていることがあります。これはヒノキバヤドリギというヤドリギ科の植物で、枝は緑色で扁平になり、葉はとても小さくなっているため、このような見た目になります。ツバキ科やモチノキ科、モクセイ科などの樹木の枝に寄生して水などをもらいながらも、緑色の枝の部分では光合成をおこなう半寄生植物です。果実は直径2mm程度で、中には粘着質の種子があります。種子が果実から飛び出



して近くの枝に張り付くことができると、そこで寄生生活を始めることができます。

写真の標本は天草上島で、上に伸びた枝のこぶ状に膨れた部分（矢印）にヒノキバヤドリギが寄生しています。このように宿主とともに標本にすることで、寄生生物の生活までも記録することができます。（前田哲弥）

No. 131
地学

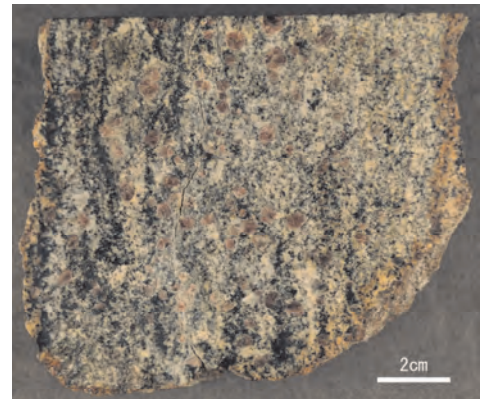
肥後片麻岩中のザクロ石

ザクロ石とは、透明で美しいものは宝石として珍重されることもある鉱物です。ザクロ石とは1つの種類の鉱物ではなく、同じような化学式で表される、性質のよく似た鉱物のグループ名です。それぞれの鉱物の性質は似ていますが、それぞれの鉱物ができる温度、圧力などの条件は異なります。

写真は、宇城市松橋町竹崎で採取された片麻岩中のザクロ石です。黒と白のしま模様のある石（片麻岩）の中に入っている赤味を帯びた丸い粒がザクロ石です。このザクロ石は、アルマンディン（鉄とアルミニウムを含むザクロ石）とパイロープ（マグネシウムとアルミニウムを含むザクロ石）が混じり合っていてできています。アルマンディンとパイロープは高い温度と圧力で形成されるザクロ石です。特にパイロープはザクロ石の中で最も高い温度や圧力を必要とします。

松橋町付近から東側の山地は、肥後片麻岩類と呼ばれる、もとの岩石が高い温度や圧力によって変化（変成）した岩石が分布しています。肥後片麻岩類中のザクロ石は、南にいくほどパイロープの成分が増えていきます。そのことから、肥後片麻岩類は南へ行くほどより高い温度や圧力を受け、変成度が高いということがわかります。

このように、岩石の中に、結晶する条件が明らかな鉱物があると、その岩石がどのような環境でできたのかを私たちに教えてくれます。（廣田志乃）

No. 132
民俗

畚

畚は稲わらなどで編んだ籠です。県内全域で古くから使われています。それぞれの農家が手作りしていたので、大きさや形は様々です。また使い方も、手で抱えたり背負ったりなど様々ですが、同じ大きさのもの2個を1組とし、天秤棒や牛馬鞍の両端に掛けて使うことが多かったようです。

畚の素材は、県央地域では七島藺で編んだものもありましたが、稲わらが主です。柔らかい稲わらで編んだ畚は、野菜や芋、果物など傷つきやすいものを運ぶ時に、竹籠よりも重宝されていました。また、稲わらの畚は大きさの割に軽くて丈夫です。さらに隙間が小さいので、穀物や土砂、堆肥など目の細かいものを大量に運ぶのにも適していました。県内では畚をフゴまたはフゴドリ、緑川流域でソラクチなどと呼んでいます。特に堆肥運搬に用いていたことからコエドリ、コイドリと呼ぶところも多いようです。写真の畚は玉名郡長洲町で昭和50年代まで使用されていました。大きさは直径約50cm、深さ約23cmで、稲わらで作られています。コイドリと呼ばれ、主に堆肥運びに用いられていました。（迫田久美子）

